

平成 21 年 3 月 25 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18401029

研究課題名（和文） 中国渭河流域における西周時代遺跡の調査研究

研究課題名（英文） The investigation research of the West Zhou(西周) age remains at the Weihe (渭河) basin in China

研究代表者

飯島 武次 (IIJIMA TAKETSUGU)

駒澤大学・文学部・教授

研究者番号：90106641

研究成果の概要：渭河北岸の黄土台地に存在する先周・西周時代の大遺跡が、先周・西周時代貴族集団の采邑である可能性を確認した。特に岐山県周公廟遺跡は、周公旦の采邑である可能性が高く、古公亶父の周城の位置である可能性もある。従って周公廟陵坡の大墓群は、周公旦一族の墓地とも推定される。GPS 調査を用いた遺跡踏査は、水源を中心に分布する西周遺跡群の地理的環境を明らかにした。西周甲骨研究においては、周公廟遺跡・周原遺跡における甲骨の出土状況を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	5,700,000	1,710,000	7,410,000
2007年度	5,100,000	1,530,000	6,630,000
2008年度	2,400,000	720,000	3,120,000
年度			
年度			
総計	13,200,000	3,960,000	17,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：考古学

キーワード：考古学 西周王朝 先周文化 渭河 周公旦 周公廟 甲骨文

1. 研究開始当初の背景

陝西省中央部を西から東に流れる渭河の北岸の宝鶏市から武功県にかけての一带は、広い意味での周原に当たり、史書に見られる周建国の舞台になっている。后稷棄の部、公劉の邠、古公亶父の周城などは、その伝承の地に関して各種の説があるが、宝鶏市から武功県にかけての渭河流域にその伝承の舞台が展開している可能性が高い。特に『詩経』大雅・緜篇、『竹書紀年』、『史記』周本紀には、古公亶父が邠から岐周に遷り、岐邑を造営する歴史が記載され、この古公亶父の周城は、渭河北岸の黄土台地に位置すると考えら

れ、この時代に入ると考古学的な遺跡と史書の記載が結びつき、歴史上の事実として考古学的な遺跡・遺物の調査が可能となってくる。

渭河北岸の所謂周原に対する考古学的な調査は、1934年から1937年にかけての蘇秉琦氏による宝鶏市の鬲鶏台遺跡に対する発掘が最初であった。1943年に石璋如氏は、当時、周原あるいは岐邑と推定される地域の踏査を行っている。その後、この地に対する本格的な調査は、1976年に行われた扶風県召陳村遺跡の宮殿址発掘や岐山県鳳雛村建築址西周甲骨出土灰坑の発掘まで行われなかった。研究代表者・飯島武次が、渭河流域

の遺跡を初めて訪れたのは、1985年3月のことである。この頃、『文物』に掲載された報告により扶風県召陳村遺跡や岐山県鳳雛村建築址の存在をすでに知っていた。ようやく中国国内における外国人の1人旅が許可されるようになり、西安市の公安局に出向き宝鶏市への外国人旅行許可書を入手することができたが、扶風県・岐山県への旅行許可は出なかった。この1985年3月の踏査旅行では宝鶏市の竹園溝遺跡、茹家莊遺跡などを見学した。しかし扶風県召陳遺跡や岐山県鳳雛鳳遺跡を訪ねることができたのは、翌1986年の夏になってからであった。1985・1986年に渭河流域の西周遺跡踏査を希望し、訪れたのは、この地が西周建国の地であったことに他ならない。中国考古学の中で金文や古典文献が残り、考古学的な遺跡も多い西周時代は、考古学の醍醐味を最も深く味わえる時代だと思っていたが、10数年経た後、北京大学・徐天進教授の誘いで思いもよらず2003年から扶風県周原遺跡の発掘調査に参加することになった。北京大学による2003年12月の岐山県周公廟周辺地域に対する一般調査で、西周甲骨片を発見し、それに基づいて2004年に行われた北京大学考古文博学院と陝西省考古研究院による予備的な調査では、再び多くの西周甲骨文の発見と灰坑や窯などの諸遺構の発掘があり、さらに周公廟の東北において王陵に匹敵する西周大型墓群の存在が確認され、そのうちM18号墓の発掘調査も行われた。2003年から2005年にかけて周原遺跡や周公廟遺跡の調査に関わったが、さらに研究を進める必要性を感じていた。

渭河流域の周都城（郃・邠・周城・豊京・鎬京）の位置と西周王陵の位置を確定するために発掘にかかわり、考古資料を収集し、あわせて測量図と分布図を作製したいと考えた。過去の日中の先周・西周時代の遺跡・遺物の研究を踏まえて、文部科学省科学研究費補助金を申請した結果、3年間にわたり渭河北岸のフィールドに立つことが出来た。

2. 研究の目的

渭河流域の先周・西周遺跡の分布調査・測地調査を行い、過去の考古資料を整理研究することによって、西周考古学上不明確な都城、特に周城（岐邑）の位置を明らかにし、併せて西周王陵の実態を明らかにすることを目的とする。

上記の研究目的を達成するために、2006～2008年度の3年間にわたって先周・西周遺跡の分布踏査・測地調査を行い、併せて中国側が行う周城を求めての発掘調査に参加することを計画した。

周武王が殷を滅ぼす以前を先周時代と呼ぶが、この時期の古公亶父は岐山を越えて周原に

遷り、周城を築き、周を建国したという。この周城に関して現在までの見解は、陝西省扶風県と岐山県の間を流れる齊家溝を挟む方約5kmの範囲、つまり狭義の周原遺跡とする説が有力であった。この説に到る考古学発掘報告や論文としては、陝西周原考古隊「陝西岐山鳳雛村西周建築基址発掘簡報」（『文物』1979年第10期）・陝西周原考古隊「扶風召陳西周建築群基址発掘簡報」（『文物』1981年第3期）・羅西章「北呂周人墓地」（西北大学出版社、1995年）・尹盛平「周原文化与西周文明」（江蘇教育出版社、2005年）・曹璋「周原遺址与西周銅器研究」（科学出版社、2004年）など、多数の報告や論文がある。しかし、これらの報告や論文は周原遺跡が周城である可能性を示唆してはいるが実のところ最終的な結論にはいたっていない。飯島武次と北京大学の徐天進教授は、2003年時点の考古学的な諸研究から、周城の位置は、従来から考えられている陝西省扶風・岐山県境界に位置する齊家溝兩岸の召陳村遺跡・莊白遺跡・雲塘遺跡・鳳雛村遺跡などの遺跡群ではなく、そこから西へ25kmほど隔たった陝西省岐山県の周公廟付近である可能性が高いとの初歩的な結論に達した。その初歩的な結論の根拠は、岐山県周公廟南側扇状地における西周時代の空心・の散布、高領乳状袋足分襠鬲破片の散布、付近における過去の西周青銅器発見を抛り所としていた。周城が、岐山・扶風県境の周原遺跡であるのか、岐山県周公廟遺跡であるのかを確認するのが、今回の研究の一つの目的である。

3. 研究の方法

北京大学考古文博学院・徐天進教授および陝西省考古研究院の協力のもとに渭河流域に分布する先周・西周時代の大遺跡に対する踏査と測地を行う。踏査の中心は、扶風県・岐山県・鳳翔県付近とした。あわせて中国側主体の発掘に参加することを計画した。

この度の研究活動に当たって、研究代表者・飯島武次、研究分担者・酒井清治、設楽博己は、主として中国側が主体となる先周・西周遺跡の発掘に立ち会い、あわせて、渭河流域の先周・西周時代遺跡の踏査を行うこととした。研究分担者・西江清高と渡部展也は渭河流域に広がる先周・西周遺跡の立地と先周・西周時代の水源に関して衛星写真を用いた先進的な研究を行うことにした。また研究分担者・鈴木敦には、西周甲骨文の解読と、所謂周原以外の地に存在する西周甲骨出土遺跡の現状をまとめることを受け持ってもらった。さらに、研究分担者・石井仁には、渭河流域における村塙（環土壘集落）に関する文献史料研究を担当してもらった。

4. 研究成果

3ヶ年に渡り調査してきた渭河流域の先周・西周遺跡に関しては、それを5地域に分けることが出来ると思う。東から、第1地域は豊京・鎬京遺跡を中心とした豊鎬遺跡群、第2地域は周原遺跡を中心とした周原遺跡群、第3地域は周公廟遺跡を中心とした周公廟遺跡群、第4地域は涇河上流の碾子坡遺跡を中心とした碾子坡遺跡群、第5地域は石嘴頭遺跡や・国墓地を含む宝鷄遺跡群である。

第1地域の豊鎬遺跡群は、基本的に西周時代の遺構を主体とする遺跡である。豊鎬遺跡には、西周時代の中型・小型墓が多数分布し少数の西周大型墓も発見され、西周全時代におよんでいる。また大型建築址や西周時代瓦の出土も確認されている。豊西遺跡においては、先周文化末（劉家第4・5期）の高領乳状袋足分襠鬲なども検出される。この遺跡群の東辺ではさらに古い遺跡が存在し、殷文化土器の出土も知られ、代表例として二里岡期に溯る老牛坡遺跡がある。しかしながら、第1地域の豊鎬遺跡群は、歴史記載から見ると文王・武王の西周建国期の都邑と西周の都の置かれた場所である。豊京、鎬京の都城としての古典文献記載は重視されるが、考古学的にその姿は未だ不明のことが多い。

第2地域の周原遺跡群は、渭河流域の北岸の中心地に位置し先周時代から西周後期に至る全時代の遺跡群が存在し、劉家遺跡や北呂遺跡における高領乳状袋足分襠鬲を副葬する先周墓の存在は、第2地域が殷後期併存期からの重要な遺跡であることを示している。しかし、所謂周原遺の中心的時代は西周中・後期と推定される。多数の窖藏遺跡、西周墓の発見があり、鳳雛甲組建築址・雲塘大型建築址・召陳大型建築址など大型建築址の発見と西周瓦の出土がある。また鳳雛甲組建築址や齊家村においては西周甲骨文が発見されている。齊家村・莊白村・董家村・強家村などの窖藏からは極めて多数の青銅器が出土し、この地域の南辺の眉県楊家村の窖藏からも多くの青銅器が発見されている。多数の銘文をもつ窖藏青銅器の存在と甲骨文の出土がこの遺跡群の特色を示す。この遺跡群の地理的位置と、史書における古公亶父の遷岐の記述を無視することは出来ず、従来から言われるように、この地が「周城」である可能性は高い。しかし、周原遺跡は西周中・後期の遺構が中心で、必ずしも直接的に古公亶父の遷岐に結びつく遺跡・遺物の発見が多いわけではなく、あるいは召公など周王朝の有力貴族の采邑である可能性も高い。

第3地域の周公廟遺跡群は、2003年暮れの西周甲骨文発見によって基本的な調査が開始されたとも言える遺跡である。周公廟遺跡において特に重要なのは、陵坡地点の卣字形墓を含む37基の西周大墓の存在である。祝家巷北地点と廟王村地点におけるきわめて

多数の西周甲骨文の出土とそこに刻まれた「周公」「新邑」などの甲骨文字は周公廟遺跡を周公旦との関係で考える上で重要な資料である。また宮殿建築に用いられたと推定される西周空心磚破片の出土も、この遺跡の性格を考える上で同じく重要な資料である。また周公廟遺跡の各地点に散布する高領乳状袋足分襠鬲の破片は、この地域に先周時代から聚落や都邑が営まれていたことを暗示する。周公廟遺跡と趙家台遺跡はいずれも大墓を有し、周公廟遺跡と趙家台遺跡と周原遺跡は、約15kmの隔たりをもって位置し、この三つの遺跡の関係には密接なものがあつたと見ることができる。この周公廟遺跡群は、所謂周原遺跡と同じく史書における古公亶父遷岐の記述との関係を無視することは出来ない。また周公廟の存在と周公旦に関わる歴史記載は考古学的にも無視できず、出土した甲骨文と史書の記載から、周公廟遺跡は周公旦の采邑である可能性が推定される。

第4地域の碾子坡遺跡群は、東西に並ぶ豊鎬遺跡群・周原遺跡群・周公廟遺跡群・宝鷄遺跡群とは離れて、北の涇河上流に位置している。高領乳状袋足分襠鬲を副葬する多数の先周時代墓の存在がこの遺跡群の特徴である。史書の上からは、古公亶父以前の周の遺跡が存在すべき地域であるが、発見された先周時代遺跡や出土遺物と、史書記載の公劉にかかわる周の歴史との関係は混沌としている。

第5地域の宝鷄遺跡群の先周・西周時代遺跡の分布は複雑である。先周時代の類型としては石嘴頭類型がこの地の代表であるが、西辺に辛店文化が迫り、辛店文化との交流が認められる。西周時代遺跡としては、茹家莊遺跡や竹園溝遺跡を代表とする西周・国の墓地が代表である。北西部の鳳翔県の水溝村故城の発見があるが、この故城と西周史の関係は未だ明確でない。

渭河流域に分布する先周・西周遺跡を5地域に分けて考えたが、周王朝建国以前および建国前後の遺跡としては、西周甲骨文が存在し多くの有銘の窖藏青銅器が存在し大型建築址のある周原遺跡群と、西周甲骨文が大量に出土し10基の卣字形墓が存在する周公廟遺跡群を、その時代の中心的遺跡と考えたい。

3ヶ年の渭河流域における先周・西周遺跡の分布調査と踏査を経て、岐山県鳳凰山の南麓に広がる周公廟遺跡は、周公旦の采邑である可能性が高いと考えるに至った。従って周公廟の北東の尾根に分布する陵坡の大墓群も、周公旦一族の墓地である可能性が高い。周公廟遺跡が周公旦の采邑であったことを認めるのなら、その地は古公亶父の周城の位置となってくる。2006・2007・2008年に北京大学考古文博学院・陝西省考古研究院が、発掘調査を行い研究代表者・飯島武次、研究分

担者・酒井清治、研究分担者・設楽博己が参加した周公廟遺跡の祝家巷北地点・廟王村地点、周公廟遺跡祝家巷北 A1・A2 地点は、古公亶父の周城の地域内に含まれている可能性の高いことを確認するにいたった。先周・西周の采邑や集落や宮殿区に関する研究においては一定の成果を得ることが出来た。しかし西周王陵の位置に関しては、顕著な成果を上げることは出来ず、研究上の未解決の仕事として心残りである。

西江清高と渡部展也による渭河流域先周・西周遺跡の立地条件と水源に関する GPS 調査を伴う研究踏査は、大きな成果を上げた。今回の調査で確認できた諸点を以下にまとめておく。

(1) 仰韶期、龍山期、西周期を通じて、基本的に各時代の遺跡分布は河川の流路と泉水湧水地点に対応する。西周王朝成立後の周原一帯の集落分布のあり方が、新石器時代のそれと同じパターンをもつことも確認された。水資源の利用に大きな技術革新がないかぎり、集落選地の第一条件が河川や泉の近傍という条件に変わりがなかったことになる。

(2) 集団の動向が安定しなかった先周期の遺跡分布は、前後の安定した時代とは大きくことなり、地形環境とは別の歴史的な要因が働いていた。

(3) 各時期間の遺跡立地は、小河川の上流部において変動が大きい。これはおそらく、河川流路が不安定な扇状地地形と関係して、山麓部の一部で時代によって水資源のあり方に変化が大きいことを反映しているようである。

(4) 大型河川である渭河や、その支流で台地中央を流れる漳河の河岸地帯では、遺跡は仰韶・龍山・西周期を通じて、ほぼ現代の河岸地形に沿って、安定した立地の傾向が見られる。その結果は、かつて史念海氏が提唱した漳河の浸食が歴史時代になって急速に進んだとする見解を再考させるものとなった。

(5) 岐山南麓の遺跡立地は扇状地地形の影響を強く受けている。水資源が得にくく地形的に不安定な扇中央部は、各時代ともに遺跡の空白地帯となっている。

(6) 扶風県・岐山県県境を流れる七星河支流の齊家溝は、龍山文化期以降、西周期以前に形成された可能性が高く、その後に西周期の周原遺跡が発展したと考えられる。一方、七星河の東に位置する美陽河は、西周期以降の歴史時代に新しく形成されたと考えられる。

(7) 仰韶・龍山・先周・西周期を通じて、遺跡の立地は河川から 600m 以内に集中する傾向が確認できる。

(8) 地形環境と水資源のあり方に重点を置いて、周原一帯の遺跡立地を 6 種類の遺跡群として分けることができた。

(9) 岐山南麓遺跡群については (5) (6) を参照。

(10) 台地南部(漳河以南)は、漳河の南岸をのぞいて、まったくの遺跡空白地帯となっている。集水度分析からみて水資源が得にくい環境であることと関係している。

(11) 台地縁辺部遺跡群の立地は、水資源としての泉水の分布と関係している。

(12) 渭河北岸低段丘遺跡群では、渭河の河水および浅い井戸の利用が想定される。

(13) 渭河南岸低段丘・秦嶺北麓遺跡群では、扇状地地形の扇中央部をさけた立地が見られる。

およそ以上のようなことが確認された。今回の踏査では、遺跡の位置に関する情報と、周辺環境だけを問題としてきた。その結果として、すでに初期国家の段階にあったはずの西周期の集落分布を、単純な分布のパターンとしてみたときには、仰韶文化期以来変わることなく河川や泉水に拘束されていたことを再認識させられた。しかしそれでは、すでに国家段階にあった西周期の集落のあり方と新石器時代のそれとの間に本質的な差異はないのであろうか。言うまでもなく周原における西周期の遺跡には、周公廟や周原遺跡のように大規模な集落址から、中・小規模の集落址までがふくまれ、また青銅器や礼制建築をともなう遺跡がある一方、それらをともなわない多くの一般的な遺跡が存在する。遺跡分布のパターンからは見えない階層性を内在させた遺跡間の複雑な関係が窺われるのである。しかし遺跡の属性を検討する前に、単純に遺跡の位置情報のみをあつかう方法においても、遺跡間の複雑な政治的関係性を示唆する所見が得られることを指摘しておきたい。

たとえば、西周期の青銅器出土地点など一部の遺跡のなかには、明らかに水資源が得がたいなど、環境的要件からは立地の理由を説明できない遺跡も存在した。それらはおそらく交通路の確保など、当該地域を政治的にまとめていた地域システムの必要から生まれた特異な地点であったと考えられよう。またもし、集落の景観と眺望という側面から集落間の位置関係に注目し、仮説的に高所から低所を見通す位置関係を、支配的と従属的という階層の上下関係に置きかえてみるならば、①岐山南麓の拠点集落(都邑)→岐山南麓の中小集落・台地中央部の中小集落、②岐山南麓の拠点集落→台地縁辺部の集落→渭河北岸低段丘の中小集落・渭河南岸秦嶺北麓の中小集落、といった階層的関係を想定することもできるであろう。

西江清高氏と渡部展也氏による渭河流域先周・西周遺跡に対する GPS 調査は、およそ以上のようなことを確認した。

鈴木敦は、所謂周原以外の地に存在する西

周甲骨出土遺跡の現状をまとめた。

2006年度の周公廟遺跡祝家巷北地点発掘において灰坑中から西周時代の背甲検出の現場に立ち会うことができた。また2007年度の廟王村地点発掘に当たっては、海外研究協力者・徐天進、王占奎両氏の配慮により、甲骨出土坑である浩善坑の数メートル北側で、浩善坑によく似た埋蔵状況を示すとされる灰坑の発掘に立ち会った。ここでは残念ながら甲骨を検出することはできなかった。しかし、周原甲骨の埋蔵状態を考える上で得難い体験をし、甲骨出土坑の焼土堆積情況などを確認した。

周公廟遺跡・周原遺跡以外の西周甲骨出土遺跡は北京市・河北省・山西省・陝西省に散在しており、今回、踏査し得たのは以下の5遺跡である。

- a：坊堆村遺跡（山西省）
- b：南小汪遺跡（河北省）
- c：鎮江營遺跡（北京市）
- d：白浮村遺跡（北京市）
- e：琉璃河遺跡（北京市）

西周甲骨は、殷墟甲骨に比して遙かに広範囲から出土し、素材も出土状態もバリエーションに富む。その背景には、卜占を受け容れた集団の多様性・卜占に対する規範の弛緩・卜占ならびに刻字自体の持つ意味合いの変化等々、様々な要因が複雑に絡み合っているものと思われる。一方で、周原地域で発見される素材は亀甲が主体であり、基本的に灰坑中から・紅焼土塊を伴って出土するケースが殆どである。周原における「統一性」と周原以外における「多様性」の対比もまた、西周甲骨を考える上で多くのヒントを内包している。

石井仁は、この地に関する魏晉南北朝関係の史料からの村塢・環土壘集落研究を行い、今後の西周集落研究に結びつけていかなければならない研究成果を出した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

- ①渡部展也「考古学GISにおける基盤情報としてのCORONA画像利用とその補正方法の研究」『日本情報考古学会講演論文集』95～100頁、2006年。
- ②徐天進「周公廟遺址の考古所獲及所思」『文物』2006年第8期、55～62頁、査読あり。
- ③雷興山「論周公廟遺址卜甲坑H45の期別与年代—兼論関中西部地区商周之際考古学文化分期的幾点認識」『古代文明』第5巻、215～230頁、査読有り。2006年。

〔学会発表〕(計 4 件)

- ①西江清高・渡部展也「関中平原における周遺跡の立地と地形漢鏡—GPSによる空間情報基盤の整備と分析」日本中国考古学会、2008年12月23日、金沢大学。
- ②飯島武次「中国における考古学研究調査と考古学実習」日本考古学協会、2008年1月19日、明治大学。
- ③飯島武次「初期国家形成期の考古学—夏王朝・殷王朝・周王朝」日本中国考古学会大会、2007年12月1日、成城大学。
- ④西江清高・渡部展也「周王朝期における関中平原の地域システム」日本中国考古学会大会、2007年12月1・2日、成城大学。

〔図書〕(計 3 件)

- ①飯島武次編著『中国渭河流域における西周時代遺跡の調査研究』駒澤大学、180頁、2009年。
- ②飯島武次編著『中国渭河流域の西周遺跡』同成社、150頁、2009年。
- ③徐天進『周原遺址の分期与布局研究』北京大学、1～510頁、2006年。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

飯島 武次 (IIJIMA TAKETSUGU)
駒澤大学・文学部・教授
研究者番号：90106641

(2) 研究分担者

酒井 清治 (SAKAI KIYOJI)
駒澤大学・文学部・教授
研究者番号：80296821
設楽 博己 (SHITARA HIROMI)
駒澤大学・文学部・教授
研究者番号：70206093
石井 仁 (ISHII HITOSHI)
駒澤大学・文学部・准教授
研究者番号：90201912

(3) 連携研究者

西江 清高 (NISHIE KIYOTAKA)
南山大学・人文学部・教授
研究者番号：10319288
鈴木 敦 (SUZUKI ATUSHI)
茨城大学・人文学部・教授
研究者番号：00272104
渡部 展也 (WATANABE NOBUYA)
中部大学・人文学部・講師
研究者番号：10365497

(4) 研究協力者 (海外)

徐 天進 (XU TIANJIN)

北京大学・考古文博学院・教授
雷 興山 (LEI XINGSHAN)
北京大学・考古文博学院・准教授
焦 南峰 (JIAO NANFENG)
陝西省考古研究院・院長
王 占奎 (WAN ZHANKUI)
陝西省考古研究院・副院長

(5) 研究協力者 (国内)

古庄 浩明 (FURUSYOU HIROAKI)
駒澤大学・文学部・非常勤講師
堀渕 宜男 (HORIBUCHI YOSHIO)
駒澤大学大学院後期博士課程歴史学専攻
長尾 宗史 (NAGAO MUNENORI)
駒澤大学大学院後期博士課程歴史学専攻
菊地 大樹 (KIKUCHI HIROKI)
北京大学大学院留学生 (駒澤大学卒業生)
高野 晶文 (TAKANO AKIFUMI)
北京大学大学院留学生 (駒澤大学卒業生)